

結核の統計2023を読む

「結核の統計2023」ダイジェスト

結核研究所臨床・疫学部

副部長 内村 和広

はじめに

今年も厚生労働省結核感染症課*1より該当年の結核年報の概況である「2022年結核登録者情報調査年報集計結果について」が発表され、結核予防会から「結核の統計2023」が刊行されます。「結核の統計」は2021年版（2020年結核年報報告）より、解説部と統計部の2部構成とし、解説部ではその年の結核年報集計結果から日本の結核疫学を10章にわたって解説しています。ここでは、各章のダイジェストから、新しくなった「結核の統計」の解説部を紹介します。

*1 令和5年9月1日の組織改編で現在は感染症対策課

1章 新登録結核患者数と罹患率およびその推移

この章では、その年の新登録結核患者について、性・年齢別分布や経年推移を解説しています。2022年に日本で結核と診断され登録された患者数は10,235人でした。人口10万人あたりの結核罹患率（以下、罹患率）は8.2となっています。2021年に罹患率9.2となり、結核低蔓延の水準である罹患率10以下を達成しましたが、2022年の罹患率も結核低蔓延の水準を維持し、さらに減少しています（図1）。65歳以上の新登録結核患者数は7,189人で新登録結核患者全体に対する割合は

70.2%となりました。また、80歳以上は4,583人で全体の44.8%となり、新登録結核患者の半数にせまる数字となっています。

14歳以下の小児結核患者数は35人で、このうち重症結核例である粟粒結核と結核性髄膜炎については発生がありませんでした。

2章 新登録結核患者の地理的分布

この章では、新登録結核患者の属性別にみた地理的分布を解説しています。新登録結核患者の地理的な分布は、北海道、東北などの東日本や北陸が少なく、中部、近畿から九州にかけての西日本が多いという「西高東低」の傾向が続いています（図2）。

また、都道府県別にみた新登録結核患者のうちの外国出生患者の割合は、最も低かった和歌山県の3.2%から最も高かった群馬県の30.4%までの広がりがありました。65歳以上の高齢者結核患者の割合も同様で、最も低かった群馬県の56.3%から、最も高かった福井県の92.9%までの開きがありました。

3章 新登録結核患者の臨床的背景

この章では、新登録結核患者の臨床的背景について解説しています。2022年の新登録結核患者10,235人の内、肺結核患者は7,454人で、肺外結核は罹患臓器別で4,111例ありました（1人の患者で

複数の臓器に結核を罹患していた場合は重複して集計しているため、肺結核と肺外結核の例数の合計は新登録結核患者数を越えています）。肺外結核で最も多かったのは結核性胸膜炎の1,969例（47.9%）で、肺外結核の約半数を占めていました。次いで、肺門・縦隔以外のリンパ節結核で560例（13.6%）、粟粒結核527例（12.8%）と続きました。

胸部レントゲン検査の結果では、2022年の新登録肺結核患者7,454人における有空洞割合は29.1%（2,168人）でした。

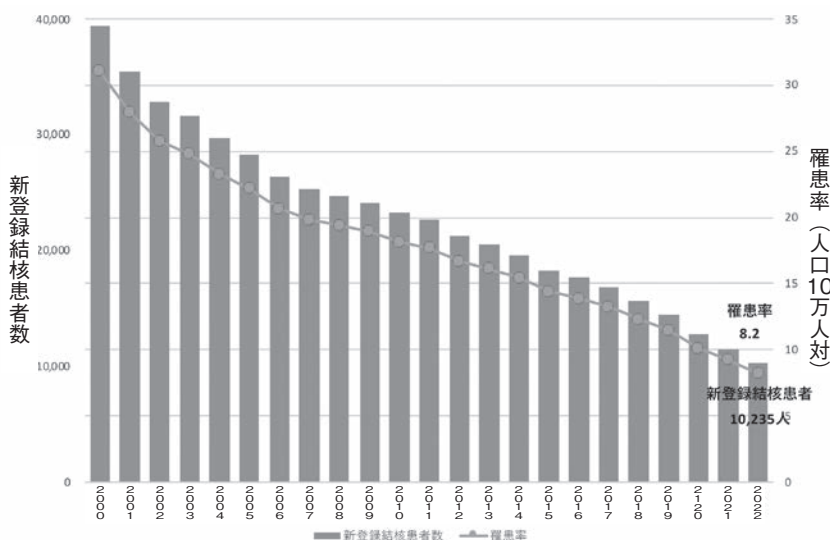


図1. 新登録結核結核患者数と罹患率の年次推移、2000～2022年

4章 薬剤感受性

この章では、新登録結核患者の薬剤感受性検査結果について解説しています。2022年の新登録肺結核患者で感受性検査結果判明者4,086人のうち、INH（イソニアジド）耐性は200人で4.9%、RFP（リファンピシン）耐性は41人で1.0%、INHとRFP両剤耐性（多剤耐性、MDR）は26人で0.6%でした。

肺結核中薬剤感受性判明者のうちで初めて治療を行う者3,899人*でのINH耐性は4.7%、RFP耐性は0.8%、MDRは0.5%でした。過去に治療歴がある者143人*についてはINH耐性が9.8%、RFP耐性が6.3%、MDRが3.5%と、治療歴がない者に比べて、耐性割合が高くなっていました（*他に治療歴不明の者が44人）。

2022年の日本出生新登録肺結核患者で培養陽性かつ薬剤感受性結果が判明した3,577人のうち、INH耐性は4.2%、RFP耐性は0.6%、MDRは0.3%でした。同様に外国出生者では、426人のうち、INH耐性は11.0%、RFP耐性は4.5%、MDRは3.3%で、日本出生者より耐性割合が高い結果でした。

5章 外国出生者の結核

この章では、外国出生結核患者について解説しています。2022年新登録結核患者10,235人のうち、外国出生者は1,214人で、前年の、1,313人から99人の減少となりました。しかし、新登録結核患者総数10,235人のうちの外国出生患者が割合は11.9%と前年の11.4%から増加しました。各年齢階級別に外国出生患者が占める割合を見ると、20～29歳が最も高く77.5%が外国出生患者でした。

外国出生患者の出生国のうち最も患者数が多かったのはフィリピン（252人）で、次いでベトナム（188人）、インドネシア（177人）、ネパール（138人）、中国（134人）、ミャンマー（99人）となりました。この上位6か国の新登録結核患者数は合計988人で、外国出生結核患者の81.4%を占めています。

6章 新登録結核患者の社会的属性

この章では、新登録結核患者の職業や社会・経済的困窮要因など社会的属性を解説しています。2022年新登録結核患者10,235人の職業は、高齢者の多くが無職に区分されるため、無職が最も多くなっていますが、64歳以下に限定した3,046人でみると、その他の常用勤労者の1,148人（37.7%）が最も多くなります。また、看護師・保健師、医師、その他の医療職・介護職を合わせた医療関係職が285人で9.4%となりました。無職は463人で64歳以下の患者のうち15.2%を占めています。また、小中学校以上の生徒・学生は266人（8.7%）ですが、このうち204人（小中学校以上の生徒・学生の患者の76.7%）は外国出生患者でした。新登録結核患者10,235人の登録時の保険では、生活保護受給中と申請中の患者を合わせると6.9%（708人）で、2022年の国民での生活保護の被保護実人員保護率1.62%（生活保護被保護者調査、厚生労働省、2022年12月分概数）と比べて高い割合と

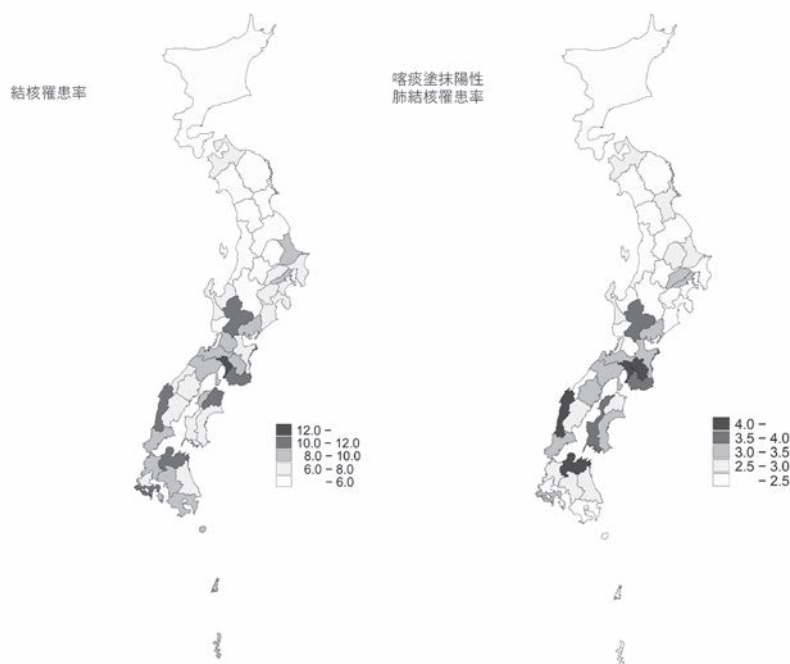


図2. 都道府県別結核罹患率・喀痰塗抹陽性肺結核罹患率、2022年

なっています。

7章 患者発見

この章では、新登録結核患者の発見方法や発見の遅れについて解説しています。2022年の新登録肺結核患者7,454人については、半数以上となる3,928人（52.7%）で咳などの呼吸器症状がありました。呼吸器症状以外の症状のみの患者を含めた、何らかの症状があって発見された患者は5,436人で72.9%になりました。この症状があった肺結核患者について、症状が出てから最初の医療機関受診までの期間を日本出生と外国出生患者でみると、日本出生患者では2週間未満が61.3%でした。外国出生患者は2週間未満の受診は41.4%で、日本出生患者よりも受診までの期間が長い傾向がみられました。

2022年の新登録結核患者10,235人について、発見方法を日本出生と外国出生患者でみると、日本出生患者では医療機関受診発見が7,556人（87.1%）と大多数を占め、健康診断発見は997人（11.5%）でした。一方、外国出生患者では、健康診断による発見が414人（34.1%）と日本出生者の発見割合を大きく越えています。

8章 潜在性結核感染症

この章では、新登録潜在性結核感染症要治療者について解説しています。2022年に新たに登録された潜在性結核感染症要治療者数は、5,025人でした。このうち日本出生患者は4,217人、外国出生患者は641人、出生国不明が167人でした。年齢階級別の新登録数をみると、日本出生者では、10歳未満の年齢階層と70～79歳にピークがありました。一方、外国出生者においては20～29歳がピークで、この年齢では外国出生の新登録者数が日本出生新登録数を上回っていました。発見方法では、日本出生者では、他疾患通院中での医療機関発見が1,077人と新登録者の25.5%を占めました。外国出生者では、接触者健診発見が366人（57.1%）となり半数以上は接触者健診による発見でした。

9章 治療

この章では、治療開始時の使用薬剤や入院期間、治療期間について解説しています。2022年の新登録結核患者10,235人の治療開始時の選択薬剤は、INH, RFP, PZA（ピラジナミド）に加えEB（エタンブトール）またはSM（ストレプトマイシン）を含む4剤併用治療が59.1%、これ以外のINH, RFP, PZAを含む3剤以上の治療が1.3%、INH, RFPを含むがPZAを含まない3剤以上の治療が30.5%でした。PZAを含む3剤以上の治療の割合は79歳以下では83.8%（5,652人中4,739人）と高いものでしたが、80歳以上では31.6%（4,538人中1,446人）と低くなりました。入院治療を開始した肺結核患者の入院日数の中央値は64日でした。また、2021年の登録患者のうち2022年末で治療成功となった患者の治療期間は、喀痰塗抹陽性初回治療患者2,296人では39.4%が180日以上270日未満、42.8%が270日以上365日未満でした。

10章 結核患者の治療成績

この章では、結核患者の治療の結果である治療成績について解説しています。2022年末時点における2021年の新登録結核患者11,495人の治療成績は、治癒19.3%、治療完了44.9%、死亡25.5%、失敗0.1%、脱落・中断1.7%、転出2.6%、治療中5.6%、不明0.2%で、治癒と治療完了を合わせた治療成功の割合は64.2%となりました。また、日本出生患者の治療成功は62.7%、外国出生患者の治療成功は76.9%でした。この差は、日本出生患者は高齢者が多く、治療途中での死亡が28.6%と高いことが要因のひとつとなっています。一方で、外国出生患者は治療途中での転出（海外への転出を含む）が11.3%となっており、これらの患者の治療継続が課題となっています。

おわりに

以上、「結核の統計2023」の解説部10章のダイジェストを紹介いたしました。本編では、図表も入って、さらに詳しく解説をしています。ぜひ、「結核の統計2023」をお手にとってご覧いただければと思います。

